

販されているヤマトイモよりも粘着力が数倍強く野生味を感じさせる食物である。ムギトロにせよ、ヤマカケにせよなかなかの味である。秋の味覚の代表はキノコといわれているが、研究不足のため試食するにいたっていない。今後家計の補助のためにも少しづつ勉強し、酒の肴の領域を拡げていきたいと考えている次第である。

## 30年目のクラス会

貝山久子

1月15日は小正月である。又の名を女正月ともいう。この日に泊りかけでクラス会を催すならわしが出来て今年で4年目になる。第1回は京都、第2回は奈良、第3回は神戸、そして今年は鎌倉でこの会合をもった。松籟を耳近くに聞くこの旅荘には12人が集まった。広島から1人、関西から2人、新潟から1人、あとは首都圏に住む8人、卒業以来はじめて、という人も中にあって、一別以来の話に花が咲いた。しかしこの夜の話題の中心は去年の会合で提案された卒業30年記念文集の出版についてで、すでに集まった30篇の原稿はタイプ印刷の小冊子になって、他のプリント類と共に皆に配られた。私も30年の間にかなり変化のあった母校キャンパスの地図を作って持参した。

人間の記憶には曖昧な点が多く含まれ、年がたつにつれてそれが曖昧なまま固定した観念になる。皆で小冊子をよみ乍ら誤りや疑問点を訂し、編集委員をきめ、もっと多くの原稿を集めて自費出版の形でもよいから印刷にしようという結論に到達したのは午前2時であった。

翌日はお昼に精進料理を食べさせて下さる山の内の長寿寺まで歩くことになり、途中八幡宮に参詣したが、丁度成人の日とあっておびただしい参拝者の中に美しいふり袖姿が目立った。夢と希望にみちあふれた20才の青春。しかし私達の20才の日々はどのように明け暮れていたのだろうか。

クラスメートの小原喜代子さんの手紙(御両親あて)の抜粋。

19年10月26日

昨日まで猛烈な忙しさで夜勤と日勤をぶっ通し即ち24時間通しの労働も何回か致しました。ヤスリの切傷やハンドルを握るために出来た豆で手がすっかり工員さんらしくなりました。指先が荒れて方解石のようにボロボロくずれている上に油がしみついてとれないので、何とも情けない手になりました。

今も私の傍でガーガーと機械が廻っております。私の仕事はプレスで鉄板に穴をあけたり、色々の形にうちぬいたり、圧しつけて形をつくったりします。ペタルをふむとガチャンと上から落ちて来て圧搾するのです。ねぼけて足をペタルにふれたりすると外傷しますからたえず緊張していなければいけません。

19年12月

今年は大晦日が夜勤明けで元旦から日勤です。この間空襲や工場の作業中死んだ時に貰える保険に入りました。3円ずつ納めて1,000円貰えるそうです。毎月3円ずつ納めるのかしら? 一度3円を納めておけばいつ死んでも1,000円貰えるのよ、と云っている人もあります。受取人はお父さまの

名前にしておきました。でも 1,000 円貰えるよりは死なない方がいいわね。

昭和18年入学と共に戦局は苛烈さを増し、19年春休みには早くも藤倉電線に動員され、8月から造兵廠で工員さんと共に働いたが、20年5月に寮が焼けたので、6月末から群馬県の農村に行き生れてはじめての農作業に明け暮れる中に終戦を迎えたのであった。

敗戦の混乱からようやく立ち直りかけた昭和22年3月私共は社会に出た。それから30年、31人の友の中早くも5人が欠けた。この年代は男性にとっても戦没者の多い年代であるが、女性にも戦争が暗い影を落していることがわかる。また26名中6人は未婚である。

長寿寺の精進料理の席には更に3人が加わって私共は一そうにぎやかに歓談し、歌い、笑い、写真を撮りあって別れた。生死を領ち会った友なればこそ友情の絆は固く、年1回のこの楽しみが、明日からの生活を支える活力となるのをおぼえるのである。

## 駅前旅館のお土産

木内信蔵

井伏鱒二の軽妙な筆に較ぶべくもないが、地理の人々がしばしば御厄介になる駅前旅館の思出を記そう。

言うまでもなく、その位置は鉄道の駅前。大きい町では宿屋街を作る。夜おそく着いて早立ちに便利である。比較的小型で安い。市内外のバスに乗り、買物・食事に便利である。少々うるさい難があるが気取らぬ所がよい。しかし戦争中のこと、虫を一匹土産にもらって、しらみと言うものに初対面したのはある県庁所在地の駅前旅館であった。

1976年8月、国際地理学会議を終えて、モスクワを立ち、コペンハーゲン、フランクフルトを経て、ヴュルツブルグに到着した。メイン川を見おろすマリエンベルク要塞や荘麗な王宮と庭園をもつ大学都市である。重いスーツケースを引きずって駅前に待つタクシーに乗り、「Eホテル・ビッテ」と告げた所、運転手は笑い出して「下りなさい、広場の向うです」と言う。しかし、くたびれてお尻の重くなった私は、「町をひと廻りしてくれ」と頼んで、もとの広場に下り立った。

部屋は狭いが清潔で、冷蔵庫にはビール、ブドウ酒類が詰められ、窓からは花に飾られた噴水の駅前広場が見渡せる。駅の後は傾斜してブドウ園となり、10万余の人口を持つ駅前としてはのびやかである。二泊目には工員らしい男女五十人ほどの団体がバスで到着し、狭い食堂はおしゃべりで賑わったが、夜10時を過ぎると物音一つも立てず、日本の観光客とは違うところをみせた。

1962年7月のオランダ訪問はすべてユトレヒト駅前のホテルから立った。建物が古く地盤がわるく、夜半に通過する貨車やトラックの振動に悩まされたが、ここは、アムステルダム・ロッテルダム・ハーグと環状をなすリング都市の核に当たり、国鉄電車は国内各地はもとより、ドイツ・ベルギーへの旅行にも便利であった。ユトレヒト大学の経済地理学ドゥヴォーイス教授のお世話になり、城壁跡の緑地にあるカフェで旅の疲れを慰やした。夕刻には先生のお宅に招かれて奥さんの手料理を頂い